



地域防災への視点

大阪大学大学院人間科学研究科 教授 渥美 公秀

阪神・淡路大震災から21年になる。各地で様々な地域防災活動が展開されている。地域防災活動の現場に行くと、専門家が正しい知識を教えるべきだとか、日頃から住民の防災意識を高めるべきだといった声を耳にする。確かに一理ある。しかし、日本の普通の地域を思い浮かべてもらいたい。その地域の防災は、専門家が教えるべきだとするだけでいいだろうか？ また、住民の防災意識を高めたら防災はできるだろうか？ そもそも、防災を進める気持ちはどこから湧いてくるのだろうか？本稿では、地域防災に対する考え方の底を流れるこうした考え方を再検討してみたい。

地域防災は専門家が教える？

もちろん、専門家が関与しなければわからない事柄は多い。建物の耐震構造、堤防の高さなど、いわゆる科学的な根拠をもとにした「正解」は必要である。しかし、現実には、正しい答えがいつも実現可能なわけではないのは言うまでもない。ただ、この言うまでもないことが見逃されがちである。専門家に任せて、それを鵜呑みにしておけば、話は早いし議論の手間も省けて楽である。しかし、自らが関わる地域の防災である。本当に専門家に任せてしまいいいだろうか。

実は、1年ほど前、阪神・淡路大震災のご遺族の皆様と専門家（防災研究者）との交流会に参加する機会があった。そこでいくつかのズレを感じた。

まず、何を救うかという根本的なところがずれていると感じた。ご遺族は、今度こそは命を守ることでできる防災を願っておられた。専門家も同様に、命を守ることでできる防災を研究している。しかし、そこに出てくる命という言葉は、似て非なる意味を持っていたように思う。一言で言えば、かけがえのない「いのち」と、生命という場合の「命」との違いである。目の前の大切な人々の「いのち」は、1つ2つと数えることなどできないし、他の誰とも取り替えることはできない。しかし、生命ということであれば、通常、「命」は、数えることでできる「命」である。だから、専門家からは、確率の話が出てくる。ところが、ご遺族の皆様にとっては、本当にこの子のかけがえのない「いのち」を救えるのかといった切なる問いが出てくる。これに対して、専門家が、約80%の確率で救えますと言ったところで、何ら説得力がないように思えた。

次に、ご遺族と専門家との間で、最終的に求めることがズレていると感じた。ご遺族は、納得することを求めておられた。できれば理解をした上で。一方、専門家は、理解を求め、その理解をもとにどうするかということは、相手に任せるというスタイルに見えた。もちろん、専門家は、理解してもらえるように、具体例なども交えながら、わかりやすく説明する。その結果、ご遺族は、専門的なことであっても、理解しやすくなる。



阪神・淡路大震災の惨状

しかし、そこで終わると、理解できるけれども、納得できないという状況が生じてしまう。人は、理解できたら行動を変えるかということそれは怪しい。一方、納得できた時には、動き出すというのが普通ではなかろうか。納得を伴わない説明では十分ではないと思われた。

最後に、言葉にすることに対する姿勢にズレを感じた。ご遺族の方々は、おそらくどうしても言葉にすることのできない体験やお気持ちをお持ちである。一方、専門家は、言葉になってこそ理解できるのだという前提のもとに、言葉を探す。だから、専門家は、ご遺族からも言葉を求める。確かに、言葉にならないと感じる経験があることは専門家もわかっている。だから、沈黙があったという記録も残す。しかし、その沈黙にどのような意味があると考え、沈黙に対して専門家はどう取り組むのだろうか。結局、言葉にならないということの意味は通じあえていないように思われた。

筆者自身も含め、専門家は、地域の住民の方々に防災の話をさせていただく機会が多い。そして、多くの場合、住民の方々は黙って耳を傾けてくださる。しかし、ここで挙げたようなズレをどれだけ踏まえて話をしているだろうか？専門家は、専門とする内容をさらに深めていくことはもちろんのこと、こうしたズレを丹念に検証していくことが必要であろう。一方、住民は、専門家による正しい解は、1つの参照点にすぎないと考えた方がよかろう。むしろ、地域ぐるみで、正しい解「正解」ならぬ成り立つ解「成解」を見いだしていくしかないのだと腹をくくるべきであろう。地域での議論や合意形成が改めて問われる。

防災意識を高めれば良いか？

地域防災というと、災害に対する地域住民ひとりひとりの意識を高めて、地域で一丸となって災害に立ち向かうといった威勢のよい言葉が出てくる。しかし、人々の災害に対する意識を高めるにはどうすればよいか分からないという言葉が続くのが現状である。実は、これは問いが間違っている。人々の災害に対する意識は低いわけでは「ない」。ちなみに、「今やるべきことを10項目挙げてください」と言われれば、おそらく、多く

の人々のリストの中に、防災は含まれているに違いない。しかし、続いて、「では、その中でもっともすぐにやるべきことを1項目だけ挙げてください」と言われると、親の介護を挙げる人、店の支払いを挙げる人、受験勉強を挙げる人・・・という具合に実に多様な応えが返ってくる。実際、目の前で介護を求めている方がいれば、防災よりそちらに力を注ぐことは自然でもある。そこで、通常は、「自分の身は自分で守るのですよ」と人々に呼びかけたりする。「防災は市民の義務ではないか」と憤ってみたりもする。しかし、人々は、そんなことは百も承知である。人々は、災害の深刻さを理解していないわけではないし、防災に対する意識が低いわけでもない。ただ、われわれの日常生活には、他に優先すべき事柄が満ちているというだけのことである。防災だけを声高に叫ばれても、すぐには取り組めない現実がある。

結局、防災だと言えば、誰もが振り向いてくれるなどと考えないことである。もちろん、防災は自分のことだけではなく、地域全体のことでもあるのだから、地域で行う訓練に参加するのは当然で、自分の都合など後回しにしてはどうかという意見に賛成する人もいることは理解できる。しかし、現実には即して言えば、参加しない人々を責める前に、地域での防災に対する発想を転換すべきである。キャッチフレーズの言え、住民の防災意識を変えるのではない。意識を変えるべきなのは、防災に熱心に取り組んでいる人々の意識の方である。

もちろん、防災活動を魅力的にすれば、より多くの人々が関心をもって参加してくれるかもしれない。実際、最近の地域防災活動では、魅力的なマップづくりが行われることがある。災害の種類を選び、どんな季節の何時頃の発災かを想定し、誰の視点(例えば、子ども)で防災マップを作るかを決め、災害時要援護者に関する情報の取り扱いなど防災上の工夫が行われる。さらに、地域の歴史的文化的施設や人気のスポットなども書き加えて、魅力的な地域マップを作ろうとする試みもあって、人々の関心を集めることがある。また、従来であれば、避難指定場所(例えば、学校)をマップ上で確認するに留まっていた活動を、実際に、その施設を訪問して、関係者(例えば、教員や子ども)と接する試みもある。

しかし、日常の様々な活動以上に魅力的な活動となっているかといえば、必ずしもそうではなかろう。ここで、発想を転換する必要がある。まず、日常、すでに行われている様々な活動に注目する。そして、人々がそれぞれに重大なこととして、あるいは、魅力的なこととしてすでに取り組んでいる事柄と別個に防災活動を作り上げるのではなく、そうしたすでに行われている活動に、減災というエッセンスを加えて行くという発想である。例えば、地域の文化祭にいくつかのブースが出るのであれば、その1つに防災ゲームなどを加えてはどうだろうか。

考えてみれば、地域防災は、防災に関わる活動が進展すれば良いのであって、防災への意識が高いことは、さしあたって、どちらでもよいのである。すなわち、防災への意識が高くても、あるいは、仮に低くても、とにかくにも防災への取り組みが実施されればよいわけである。言い換えれば、災害に備えることは、それほど切羽詰まっている



阪神・淡路大震災から21年、「ひょうご安全の日 1.17のつどい」

とも言える。こうした発想に基づく活動は、最終的には、防災を目指すのだが、あえて、防災だとは唱えないので、通常の「防災と(声高に)言う防災」と対比して「防災と言わない防災」と名付けられる。

なぜ防災に取り組むのか？

自分の住む地域の防災に取り組むのは、実に当然の事柄のように思える。実際、全国津々浦々でユニークな地域防災活動が繰り広げられている。本誌「地域防災」は、その情報源として欠かせない存在である。ただ、阪神・淡路大震災を経験した者の一人として、また、新潟県中越地震や中越沖地震、そして、東日本大震災の被災地で様々な方々と交流を深めてきた者の一人として、自分の住む地域だから防災に取り組むのは当然というだけでは、どこか寂しい気がしているのも事実である。

それは、一言で言えば、悲しみである。確かに、悲しみと文字にしてしまうとどこか違う気もする。悲しみ、哀しみ、愛しみと漢字を変えてみても、griefなどと言語を変えてみても、うまく表現できない。あの日、西宮の街は圧倒的な悲しみに包まれた。そして、それはずっと筆者自身の中に流れ続けている。地域で防災を進めるのはなぜか。それは、悲しみともう少しくましく出会うためであると言えば間違っているだろうか。

これからの地域防災に向けて、専門家の話も聞く機会があるだろうし、地域住民の意識を高めるために様々な工夫も凝らされるだろう。しかし、まずは災害に遭う悲しみについて、学び直してみてもどうだろうか。災害を題材にした展示施設も各地にあるが、ともすれば自然のメカニズムの説明が中心になっていたり、緊急時のグッズが所狭しと並べられていたりする。それもいい。しかし、それだけでは、悲しみがつい果ててしまおうとを感じる。まずは被災することの悲しみがどこかで分かち合えれば、自ずと地域防災への姿勢は生まれてくるのではなかろうか。阪神・淡路大震災から21年。筆者としては、悲しみの果てることのない文脈を作っていくことに励んでいきたい。1月17日は、そう誓い直す日でもある。